史跡賞田廃寺跡現地説明会資料

平成18年８月20日　岡山市教育委員会

賞田廃寺は、飛鳥時代（７世紀中頃）に建てられ、一部の建物は中世（14世紀頃）まで使われたお寺でした。以前からこの辺りは、白鳳時代（７世紀後半）や奈良時代（８世紀）の古瓦が出土する古代寺院跡として広く知られていました。

昭和45年の発掘調査によって白鳳時代と奈良時代の二度に渡って大整備がされていたこと、金堂・塔・西門および回廊・築地跡の一部が発見され、およそ１町（110m）四方の寺域であることが判明しました。塔と西門からは中央の有力寺院では用いられるものの地方ではごくまれな凝灰岩壇正積基壇が用いられていることなどが明らかとなって、昭和47年３月に国史跡に指定されました。

岡山市教育委員会では史跡公園として整備するために、まだはっきりとしていない建物の配置や、それぞれの時期などを確かめることを目的として、平成13年12月から発掘調査を実施してまいりました。調査により以下のことが明らかとなっています。

主要な建物の配置は、金堂が東西両塔の中軸上からやや東にずれており、畿内の有力寺院とは異なり、変則的な配置をとります。

白鳳期に建てられた金堂基壇は、東西15.5m南北12.6mに復元でき、礎石や抜き取り穴から、東西５間南北４間の柱間の建物であったことがわかりました。基壇の外周は中世に基壇上面からおよそ1.8mの深さまで掘り下げられ、14世紀に焼失したと考えられます。

講堂は金堂の北にも西にも存在せず、いまだ所在不明です。

当初西門と考えられていたものは塔であると改められました。このことで、奈良時代になって東西二つの塔が建てられ、寺地の大整備がはかられたことが明らかとなりました。東塔は凝灰岩壇正積の一辺約12m四方の基壇で、階段が東西二方向につきます。西塔同様中世には大きく破壊されています。西塔は、一辺約11m四方の凝灰岩壇正積基壇の外側を、自然石で一辺約16m四方に取り囲み、南辺には石段がつきます。瓦についた傷から

東塔が先に西塔が後で建てられたことがわかります。東西両塔の周囲からは、両塔とも異なった規格の基壇外装石が見つかり、第三の凝灰岩壇正積基壇があったと推定されます。

金堂などの主要建物群を囲う南の塀は、幅２ｍの溝とこの溝と南に並行する柱穴列から、９～10世紀頃には掘立柱塀が作られていたようです。西は茶臼山を利用していたと考えられます。北は地山が露出した自然地形や砂に埋もれた土盛りから、東は幅２ｍで並行する南北溝から築地塀が作られていたと考えられます。これによる範囲は南北約90ｍ東西約140ｍです。

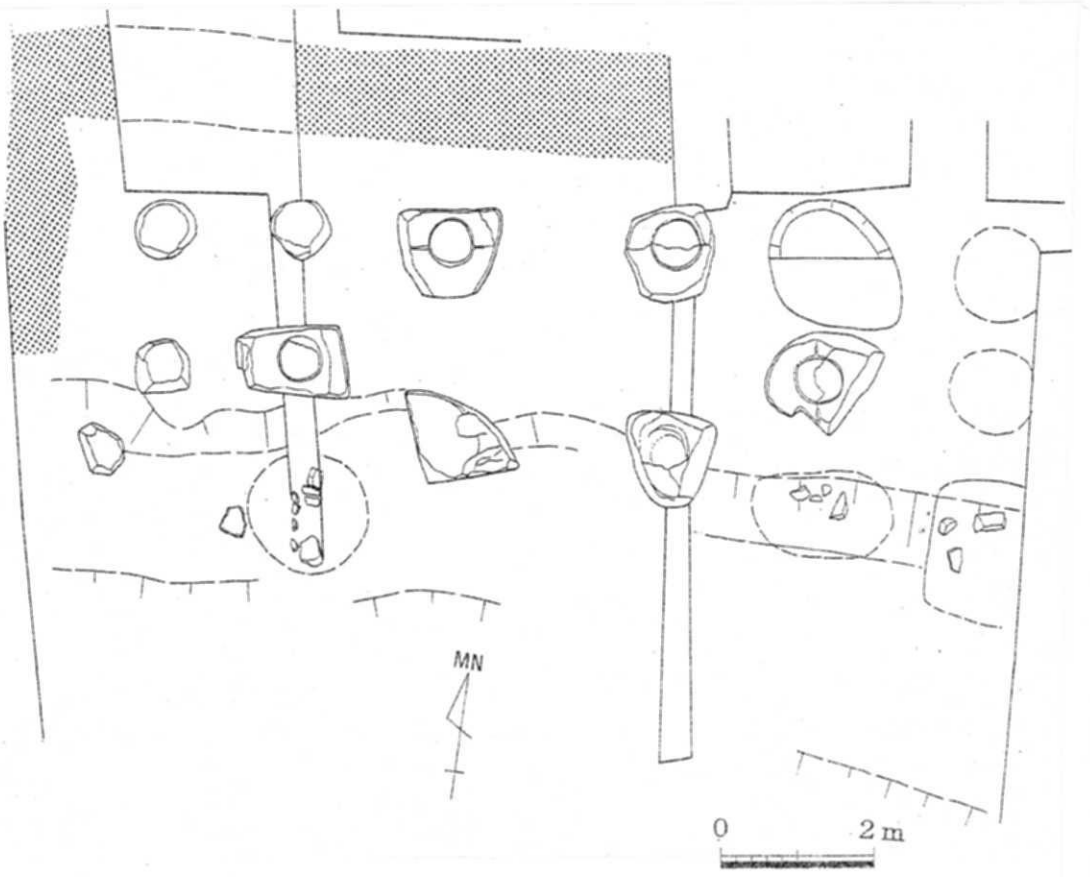
西の山（茶臼山）の裾には９～12世紀頃にかけて、銅の鋳造や鉄鍛冶などを行った工房がありました。

今年度の調査では、金堂の真西で西塔の真北に当たる地点で、新たに９つの礎石が発見されました。後世の耕作などにより南側は無くなり、礎石や根石などが北側の３列分残っています。もともとは東西５間南北４間の柱間を持つ建物と考えられます。柱間はおよそ1.8ｍですが、中央の礎石は2.7～2.8ｍの間隔があります。礎石は大きいもので長さ1.5ｍをこえ、柱座や地覆座を削りだしています。地覆座の加工はほかに比べて粗く転用時の再加工と考えられます。この建物は礎石の北側と西側の雨落ち溝中の瓦から、室町時代に建てられた仏堂と考えられます。

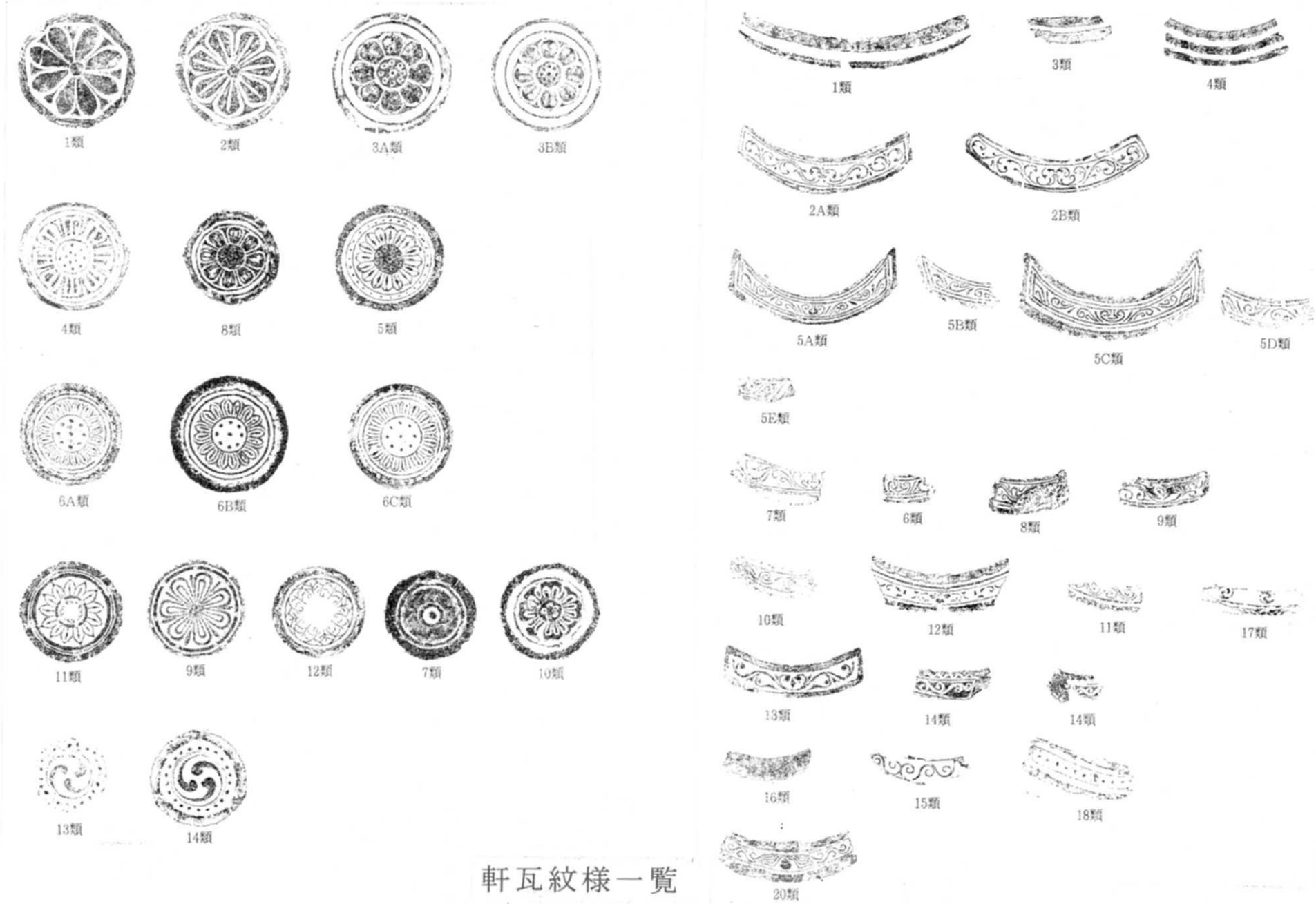
このほか、南門を明らかにするため市道部分の調査も行いましたが、その手がかりは得られませんでした。

これまでの主な遺物は、飛鳥から中世まで各時代の瓦、鴟尾（しび）、風鐸（ふうたく）、瓦塔、瓦経、円面硯、中国製磁器などがあります。

主要建物の配置



中世仏堂平面図


1類
2類
3A類
3B類
4類
8類
5類
6A類
6B類
6C類
11類
9類
12類
7類
10類
13類
14類
1類
3類
4類
2A類
2B類
5A類
5B類
5C類
5D類
5E類
7類
6類
8類
9類
10類
12類
11類
17類
13類
14類
14類
16類
15類
18類
20類

軒瓦紋様一覧